

「見えないものを見る力 社会を見る力」を育てる授業

加藤 敦史(本学教職研究科准教授 教科教育学)

私が担当している教職大学院科目の社会科教育実践演習では、院生を連れてフィールドワークを行っています。といっても、どこか遠くに行つてわざわざ有名な史跡や地形の場所を尋ねるのではありません。普段の生活をしている、特に代わり映えしない場所を訪れるのです。今回はキャンパス周辺の巡検。観光客や修学旅行生はいません。通勤や通学、買い物を急ぐ人、自転車、車ばかり。どこにでもある都市の風景です。学生から「ここに何があるのですか」「毎日ここを通っていますが・・・」「二条城に行ったらいいのに」と質問や疑問が聞こえます。史跡を訪れれば、その時代の出来事と登場人物が現れ、雄弁に語る学生たちにとって、毎日の風景には関心を示しません。キャンパスの南側出口が坂となっている。周辺には木材店が多い。近くに川が流れている。友禅染めの工場がある。二条駅から続く御池通の南側には多くの医療施設が立ち並ぶ。それらの日常の風景には気を留めません。

私たちは地に足をつけて生きているのでしょうか。災害が発生するたびに、「初めてだ」、「知らなかった」という声を聞きます。しかし、それは「地域」を見ていないだけなのです。

この授業では「見えないものを見る力 社会を見る力」を育て、独自の教材(授業指導案、資料)を作ることを目的にしています。そのことは「地域」をしっかり捉えることにあります。昨今、「地域」は政策、経済、環境、国際、芸術そしてSDGsとあらゆる場面でその関係性が強く叫ばれています。社会科学の学習の対象は地域に展開しているからです。

教師が目の前にいる児童生徒のために、独自の教材をつくる。フットワークを軽くし、労を惜しまない。これは教材づくりの鉄則です。教師が新たな「地域」を捉えることで、児童生徒は自らが生活する場に新たな発見と驚きを覚え、真正の学びをします。地域の課題や将来あるべき姿を構想し、地域と共に生きる人間となることでしょう。社会科教育は市民的資質までを目標

の射程としてきた教科であり、目標達成は長期にわたるものです。

ところで、ふるさと納税で物議を醸した、ある自治体は高額な返礼品を止め、地場のタオルや玉ねぎを出品しました。そうしたら全国から「いつまでも大切な技術が継承されていくことを願っています。今治タオルのように、もっと広く認知されるようになってほしい。」「玉ねぎの味の良さは知っていましたが、現在関東に住んでいると認知度が今一つです。勿体ない!ぜひもっとアピールして全国区に躍進してください!」と全国から応援が多く届いているそうです。これは「地域」と深くかかわる事例でしょう。



千本三条交差点にて 右の生け垣は朱雀キャンパス



1/20000「京都南部」明治20年測図 部分修正